

## 特別寄稿

### 長い夜の夢

— 日本システムの「TQA」 —

(株)日本原子力産業会議  
副会長

森 一 久

よくも続くもの、と嫌になるくらい連日のように新聞紙上を賑わす「不祥事」や責任者の「陳謝」。その中には、総理大臣も時々取り違えるように、問題の人の大臣への登用と辞任、そして「陳謝」など日本の社会が最近漸く近代化しつつある故に表面化したものもあるけれども、かなりの部分は、日本が国際社会の中で一人前に生きていくうえで避けて通れない、「日本システム」の総点検という大波に洗われて露呈した恥部といえよう。

その日本システムの再構築のため、各種の「改革」の議論が花盛りであり、行政改革では20もあった省庁を12にスリムにしようとか、財政改革では2003年までに赤字国債をゼロにするとといった、従前に比べれば極めて革新的な手段が論じられている。しかし、そんな改革はいずれも、国民の各界・各層に大きな痛みを強いざるをえないものである上、その痛みは、とても公平にとりかねなく、というわけには行かないものばかり。さらに、改革の実行に当たる人の多くは、在来システムの中をのし上がった方々でその品格が冒頭で述べた様な体たらくでは、日本システムの改造は容易なことではない。

顧みれば品質保証の最初は、ハードの管理によって生産品の品質を確実なものにしようとする努力から始まり、それが全社品質管理TQCなどを踏まえて、今日のISOによる国際的な品質保証QAへと進んできた。その間、QAはソフトは勿論、関与する人間を視野にいれた総合的なものへと脱皮・発展してきた。そして最近、国際的かつ人間社会全体いわば地球規模のQAへと進もうとしている。

新しい日本システムでは、その節々で大切な役目を担う方々が、国際的にまた社会的に新鮮な感覚に富み、国民が手本にするに足りだけの品性を備えていることが先ず前提となることは明らかである。

そこで、このような「品性」を保証する上で、また新システム全体の品質を確保する上で、QAの発



展過程での経験や手法が、なにか役立たないものか。これが、バブル崩壊以来長い夜の続く、日本の一隅で見た、私の夢である。

(当会顧問)

### 社会・経済環境の変化と品質保証

眞 壁 肇

1980年代後半のバブル経済の崩壊は、日本経済の現在の低迷をもたらしている。このような社会・経済環境の下において、行政改革、規制緩和やコスト改革などといった社会構造の再編につながる多くの提言が示され、その実現を目指した活動も着々と進められている。ここで、いかなる環境の下においても、われわれの生活の基本を支えるシステム・製品とサービスの品質を向上し、これを確保することが基本であるということは変わらないと思う。

近年、この新しい時代を目指してコストの改善・改革を進めるのに品質を論ずることは……という話を耳にしたことがある。これは上の考え方とは話の論理が逆であろう。私が50年近く前に品質管理の勉強を始めたときには、よい品質を創り出してコストの低減を実現しなければならないと教えられたものである。このことは、生産工場において品質の改善が進めば、不良品が少なく工程の流れはよくなり、自動化も実現して、かつよい品質の製品は広く市場に受け入れられるという実例で、誰でも納得できよう。

コストを下げれば品質は落ちるとか、品質をよくすればコストが増える、というのではそこに英知の入り込む余地はない。コスト競争力のあるすぐれた品質の製品とサービスを創り出す品質保証の役割は、これからますます大切であると考えている。

(当会名誉会員)